

中島郡

〔尾張志〕古今のうつりかはり

凡六國史をはじめ、和名類聚抄、延喜式、その外もろく、の古記録どもに、皆中島とかきて、更に外の文字を用ひたる例なし、參河國猿投神社の所藏なりしといへる尾張國古圖に、南の海の中に一箇の島をかきて、中島と云るせり、いと古き世にはさもありしなるべし、吉蘇川墨俣川などの末の幾派にもわかれて海におつるあたりは、おのづから島となりて、今海東郡沖の島村、馬島村のごとき地も、海中の小島なりしが、年歴をふるまゝに川上より砂土流れ來て、地つゞきとなり、延喜式和名抄などの頃には、まさしく郡となりしかも、はかりがたし、かゝればかの尾張の古圖も、ひたぶるに僞作ともいひがたき、にや、近年諸桑村の地水より、古代の船の大きやかなるを掘出しつるにても、考ふべし、信濃國の川中島などのごとき地、諸國に例多くみな中島と呼り、中島宮縁起に、むかし倭姫命八ッ節の竹の杖を四ッに折て、四方に投給ひしが、八ッの竿竹と生たらし、そこを御園といひ、其四隅のうちを中國とよびし、是中島の郡名の起れるもとなるよし記したれど、附會甚しくうけがたし、此地京都より當國の入口にて近ければ、にや、むかしの國府館も、國分寺、國分尼寺、學校などもありて、いとおもたゞしき郡なりしが、斯波氏の守護職たりし頃より、清須を城地とし、其後今の名古屋を府城とし給ひしかば、道隔りて片田舎となれり、天正十二年、當郡のうち三十四村美濃に屬きし事、葉栗郡の條にいへるがごとし、

〔張州府志〕

中島郡

疆域

東西三里、南北四里、東接丹羽郡、北接葉栗郡、南隣海東郡、東南界河與春日

井郡、接壤、西以岐蘇川爲界、西南接海西郡、

〔日本靈異記〕中力女示強力緣第廿七

尾張宿禰久玖利者、尾張國中島郡大領也、聖武天皇食國之時人也、○下略

〔尾張志〕古今のうつりかはり

葉栗郡